新・気仙風土記（上）

千葉俊雄

はじめに

岩手県南部の海岸沿いに、陸前高田市がある。そこを中心に、北隣の住田町、大船渡市の一部と南隣の気仙沼市の一部地域を気仙地方（地区）と呼ぶ。旧国名は「陸前」。伊達藩の領地で、亡父の故郷でもある。

ここにまつわる幾つかのエピソードを紹介したい。気仙地方の風土、人情をご賢察いただければ、幸いである。

（注、タイトルを「新・気仙風土記」としたのは、一九六七年五月に、金野静一著「気仙風土記」が既に出版されていたからだ。）

一、気仙大工

気仙地方には、船大工や宮大工と呼ばれる、船やお宮を造る高度な技術を持った大工が多い。特に、気仙地方に住む船大工や宮大工を「気仙大工」と呼んでいる。

陸前高田市（現在）小友の船「中吉丸」の船頭、三之丞は気仙大工の血筋を汲み、船人（船員）からの信頼も厚い。また、船人の中にも、気仙大工の血筋を持つ者がいた。

天保十（一八三九）年十一月二五日、中吉丸は、五十集荷物（干物や塩魚等の荷物）を積み、常州那珂湊へ向け小友浦を出帆した。航海十日目、中吉丸は大変な時化に遭った。大きな波が中吉丸を襲う。そこで三之丞は船人に、若布等の軽い荷物から海に捨てるよう、指示を出した。最後に檣を切って、海に投げ捨てた。こうして船の安定を図り、漂流した。漂流約一ヶ月。中吉丸は太平洋に浮かぶ、とある小さな島へ漂着した。そこは、当時アメリカ領の小笠原、父島だった。

島には、先住民がいた。アメリカ人、セボリー達で、寄港する米英の捕鯨船に、水や食糧などの商いをして、生計を立てていた。三之丞らはセボリー達に身振り、手振りで「腹がへっている…」「助けてくれ…」と窮状を訴えると、島民達は船を湊へ曳航し、煙草や食事等を持ってきて、世話をしてくれた。落ち着くと、三之丞らは海藻や魚を捕って生活をした。また、若手の船人三蔵は、三人で持つ柱を一人で運んだり、他の船人達も島民の家を建てるのを手伝い、気仙大工の本領を発揮した。こうして三之丞らは、島民達から大変感謝され、二ヶ月後に島を離れる時、島民は手を振って名残を惜しんだという。

ところで、中吉丸が遭難した当時は、鎖国の世。日本を出た者は、厳しい取り調べの上、場合によっては、死罪の掟があった。しかし、中吉丸が日本に戻ると、荷物を調べられ、父島の様子を訊かれただけで、全員が故郷の小友の土を踏む事ができた。それは、幕府が急速に発展している異国の様子を少しでも耳にしたかったからだろう。

後に、幕府は外国奉行、水野忠徳を咸臨丸で小笠原に派遣し、米国政府と領土確認をした際、小笠原が日本に帰属する事がすんなりと決まった。それは、アメリカ側の担当官がセボリーだったからだ。こうして日本とアメリカの絆が深められる事になった。それも、中吉丸の船人達の下働きがあったからだ。

異国との絆深めし野分かな　　俊雄

【参考文献】千葉一栄著「中吉丸の謎」

二、高田松原

二〇一一年三月十一日、東日本大震災の津浪で、高田松原の七万本の松が一本を残すのみとなった話は、よく知られている。十年後の二〇二一年には、市民ボランティアの手で、四万本の松が植えられた。業者でなく、市民の手で松を植えたのは、木を大切にする、如何にも気仙大工の郷らしい話だ。被災前の松林には、金田一京助が揮毫した、啄木の「いのちなき砂のかなしさよ　さらさらと　握れば指のあひだより落つ」の歌碑があり、何組もの海水客が憩っていた。

やがて、四万本の松が大樹となり、緑陰に津浪前の光景が再び見られるに違いない。

小雪舞ふ津浪だ逃げろてんでんこ　　俊雄

松四万植へて松原海開き　　俊雄

三、千葉周作

同じく被災前、「千葉周作生誕の地」の碑が、陸前高田市を流れる気仙川畔にあった。周作生誕地の説は他に、気仙地区を含まない気仙沼説や、県南中央部（一関付近）説等もあるが、私が知り得た範囲では、陸前高田説が有力なようだ。

千葉周作は、北辰一刀流の剣法の創始者だが、この流儀は、「瞬速、心、気、力の一致」。また、私は、「抜かずの刀」とも聞いている。血気早い幕末の士にむやみに刀を抜くなという戒めではないかと思う。道場は、東京神田のお玉ヶ池にあり、山岡鉄舟や新撰組の山南敬助、伊東甲子太郎などの剣士を輩出している。また、周作の弟、定吉は坂本竜馬を指南している。幕末の剣士を気仙地区が生んだと言えなくはない。

浅田次郎著「壬生義士伝」では、新撰組に入る為、南部藩を脱藩する藩士が務めていた藩校の子に「南部藩は、『石割り桜』を持つ藩だ。桜は石ば割って咲く。（中略）盛岡の子なれば、他に先駆け、あっぱれな花こば咲かせろ。」と激励する。周作の教えを受けた幕末の剣士も、幕末期という「石」を割り、新たな時代の「花」を咲かせようとした。（※注、石割り桜とは、花崗岩の割れ目に桜の木の根が入り、割れ目を拡げ、岩から桜の幹がすっぽり出ている。国の天然記念物に指定され、現在は盛岡地方裁判所の構内にある。岩の周囲は、二十一m。樹齢三百六十年のエドヒガンザクラ。）

リアスの小村は、長い日本の歴史の「隠し味」となっていた。話は次回に続ける。

石ば割り花さ咲かせと南部富士　　俊雄